

指導資料

鹿児島県総合教育センター

平成30年4月発行

外国語 第86号

対象	小学校 中学校 義務教育学校
校種	特別支援学校

外国語活動の学びを「読むこと」、「書くこと」の指導につなぐ小学校外国語科の授業づくり

平成32年度に小学校で教科化される外国語科について、その目標や内容、指導方法等に関する理解を深める必要がある。そこで、現行の外国語活動と小学校外国語科の相違点や共通点を押さえつつ、特に、音声指導を文字指導につなぐ指導のポイントについて、指導の具体例を通して提案する。

1 外国語科が目指すもの

平成32年度から小学校で教科として導入される外国語科では、これまでの外国語活動の成果と課題を踏まえて、「読むこと」、「書くこと」を加え、言語能力向上の観点から以下の事項について指導を行い、言葉の仕組みの理解等を促す必要があるとされている。

- ・ アルファベットの文字や単語などの認識
- ・ 日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き
- ・ 語順の違いなど文構造への気付き

外国語科の内容は、児童の発達の段階に応じて、中学校との円滑な接続を考慮して設定されている。また、外国語活動が外国語への慣れ親しみを目標としているのに対し、外国語科では知識及び技能の定着を目指している。

外国語活動は、コミュニケーションへの積極的な態度の育成を重視し、その成果は中学校進学後にも好影響を及ぼしており、今後も大切にしていっていきべきものである。ただ、これまでは、「なんとなく分かればよい」、「伝わりさえすればよい」という指導に終始しがちであった。しかし、知識及び技能の定着を目標とする以上、今後は、正確さにも留意して指導を行うことが求められる。

2 「読むこと」、「書くこと」に関する目標

外国語科の英語の目標のうち「読むこと」、「書くこと」については以下のとおりである。

読むこと	ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。 イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。
書くこと	ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。 イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

小学校段階で児童が自分の力だけでできるようになることは、大文字と小文字の名称（“A”の名称：[ei]）を読んだり、それらを書いたりすることである。語句と表現（文）については、「音声で十分に慣れ親しんだ」簡単に基本的なものを読んで理解したり書き写したり、例を参考に書いたりすることまでである。文字を扱うとはいえ、音声中心の外国語活動の指導を踏まえることを前提としており、児童が初見の英語を読んだり、何も見ないで語句や表現を書いたりすることが求められているわけではないことに留意したい。

3 「読むこと」、「書くこと」の指導内容

以下は、文部科学省作成による新教材「We Can!1・2」の題材及び文字を扱う活動である。小学校学習指導要領では、各学校が学年ごとの目標を定めることを求めている。本教材は今後発行される教科書の見本としての性格をもつことから、題材の配列等は学年ごとの目標を設定する上で参考になると思われる。

表1 「We Can!1・2」の題材及び文字を扱う活動
(表中の□は題材名, □は文字を扱う活動を表す。)

単元	第5学年	第6学年
1	自己紹介と名前のスペリング 大文字の識別と文字の名称の読み	自己紹介 英語らしい音への気付き
2	誕生日とバースデーカード作り 大文字の書写	日本文化のよさの再発見 例を参考にした書き取り
3	時間割と世界の学校生活 小文字の識別と文字の名称の読み	人物紹介 例を参考にした書き取り
4	日課・頻度の表現 小文字の書写	自分の住んでいる地域 例を参考にした書き取り
5	身近な人ができること 文字の音への気付き	夏休みの思い出 例を参考にした書き取り
6	行きたい国 ポスターやパンフレットの文字の読み 語句の書き写し	東京オリンピック・パラリンピック 見たい競技についての読みと書き写し
7	道案内(位置と場所) 語句の書き写し	小学校生活の思い出 例を参考にした書き取り
8	レストランでの丁寧な言い方 語句の書き写し	将来の夢・職業 例を参考にした書き取り
9	自分の尊敬する人 語句や表現の書き写し	中学校生活 推測しながらの読み

文字については、第5学年のUnit 1からUnit 4までで四線上に正しく書くことができるようにする。その後、文字を読む活動も段階的に取り入れながら、語句及び表現(文)を書き写す活動まで行う。特に、第5学年では語句の書き写しに多くの時間が割り当てられており、表現(文)の書き写しはUnit 9からとなる。そして、第6学年では、例を参考にして書く活動が示されている。このような配列から、早い段階から表現(文)を書かせるのではなく、時間を掛けて書くことに慣れ親しませることが重視されていることが分かる。

4 文字指導の留意点

(1) 音声から文字への段階的な指導

指導のポイント

- 音声指導を十分に行う。
- 書かせるまでに細かな段階を設定する。
- 掲示物や板書の字体系や配置に配慮する。

語句や表現を習得するには、音声(例: [ænt]), 形式(ant), 意味(アリ)が相互に結び付く必要がある。そのための指導としては、以下のような流れが考えられる。

- 1 音声に合う意味を選ばせる。
- 2 意味に合う音声を言わせる。
- 3 音声に形式(綴り)を添えて見慣れさせる。
- 4 音声に合う形式(綴り)を選ばせる。
- 5 意味に合う形式(綴り)を選ばせる。
- 6 読ませる。
- 7 なぞり書きさせる。
- 8 書き写させる。
- 9 例の中から語句や表現を選んで書かせる。

指導に当たっては、英語を読ませたり書かせたりすることを急がないことに留意する。児童の中で音と意味がしっかりと結び付き、頭の中で浮かんだ意味を音声化できるようになった後に、読んだり書いたりする活動に取り組みせるようにする。教材を工夫したり、ペアやグループでの活動を取り入れたりすることにより、上記の活動は更に細かな段階に分けることができる。こうした工夫を通して、児童が英語を書く活動に対して難しさを感じないようにすることが大切である。

なお、絵カードは、図1に示すように、意味(イメージ)だけのものから文字を強調するものまでを段階的に示すようにする。



図1 絵カードの例

また、表現(文)を示す時は、文構造への気付きを促すような配慮も大切である(図2)。

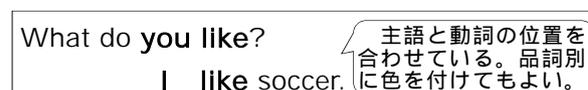


図2 板書での文表記の例

(2) 正確なインプット機会の保障

指導のポイント

- 正しい発音に触れる機会を保障する。
- 表現(文)は不必要に区切らず、音のかたまりで捉えさせる。

下の表2の例のうち、語句や表現の導入場面における望ましい指導はどれであろうか。

表2 語句や表現の導入場面における指導の例

	指導の例
A	片仮名を読むような音を聞かせ、児童が同様の発音をすることも許容する。
B	正確な発音を聞かせるが、児童が発音で困難さを感じないように、片仮名で読み方を示したり、書き取らせたりする。
C	正確な発音を繰り返し聞かせ、児童にも注意して発音することを求める。

言葉は、実際に使われ、誤りが修正されたりする中で獲得される。そのため、誤りに対して柔軟な態度で指導することは、これまでどおり大事にする。しかし、知識及び技能の定着を目指す外国語科では、上記Cが望ましい指導であり、音声による正確なインプット機会を保障する必要がある。

例えば、“November”という語を扱う際に片仮名式の発音を認めていると、児童が“v”と“b”、“m”と“n”の音の区別を意識することなく使い、それが受容されてしまう可能性がある。しかし、仮に児童がこの語を“Nobenber”と書いた時に、それを許容する指導者はいないであろう。書く時と一貫した音声の指導が、無用な誤りを避けることにつながることに留意し、表3に示すような指導を行いたい。

表3 語や語句、表現(文)の指導の例

	指導の例
語	基本的には語をひとまとまりの音として扱う中で、児童が英語の音と文字の関係に気付くようにする。
語句 表現 (文)	音の強弱や語と語の連結などに配慮したインプットが行われるようにする。その際、表現(文)を一語ずつ区切って聞かせたり言わせたりする。

特に語句や表現(文)については、例えば、“I get up at ten.”を扱う時には、[aigetʌpə(ə)ten]というひとかたまりの音として聞かせたり言わせたりするようにする。英語の自然なりズ

ムや速さに慣れ親しんだ後に文字と出会うことにより、児童は、“getup”や“atten”など、語と語の一部の音がつながって発音されることに気付くことができるようになるのである。

(3) 指導者の役割

指導のポイント

- インプットの提供者とコミュニケーションのモデルとしての立場を使い分ける。

教師が児童に英語を聞かせる場面は、二つに分けられる。一つは、語句や表現を導入する場面、もう一つは、導入済みの、あるいは既習の言語材料を使ってコミュニケーションを図る姿を見せる場面である。

前者の場面に向けては、その日に扱う語句や表現の発音を十分に確認した上で授業に臨みたい。ただし、インプット場面を全て一人で担う必要はない。仮に教師が自分の英語の発音に自信がある場合でも、デジタル教材等やALT等の外部人材を有効に活用したい。様々な発音に触れさせることは、児童にとって有益なインプットになるからである。

後者の場面では、教師が自ら積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする姿勢を児童に示すようにする。ここでは、流暢さに焦点を当てた英語使用を行う。児童は、最も身近な日本人の英語話者である教師が言い間違いや言い直しをしたり、教材や辞書等で確認したりする姿から、コミュニケーションを図ろうとする態度とは何かを学ぶことができる。まずは、教室英語や既に扱った言語材料を積極的に使いながら、コミュニケーションを楽しんでいる姿を示すよう心掛けたい。

5 実践例

本実践は、テレビ電話で「タイの子供たちと互いの一日の生活を紹介し合う活動」を実施したものである。授業では、単元終末の目標に向けて、相手意識をもって英語を読んだり書いたりすることに必然性を感じながら、意欲的に取り組む児童の姿が見られた。

○ 単元の指導計画（第6学年2学期）

（鹿屋市立笠野原小学校 小窪卓也教諭による実践）

文字指導の工夫	次	活動内容（は文字を扱う活動）	教師の働き掛けの視点
前の単元で扱った自己紹介の活動を想起させ、自分の名前と好きなものの名前を自己紹介カードに書かせる。	1	学習計画を立てよう。 【単元終末の目標】 タイの友達と、一日の生活を伝え合おう。 ・ 単元の学習計画作成 自己紹介の練習とカードの準備	学習目標の明確化 単元終末の活動のイメージをもたせ、英語で自分たちの生活を説明することの必然性を感じさせる。
カードの文字を相手に見せながら自己紹介をさせる。	短時間	自己紹介をしよう。 ・ 自己紹介（タイとのテレビ電話） ・ （事後）感想、写真等の交換	見通しをもたせる工夫 目的達成のための準備の活動 ・ 相づちなどの表現に毎時間チャンツで慣れ親しませる。 ・ モデルの発音に続いてジェスチャーと発音を繰り返させ、一日の生活の表現に慣れ親しませる。 ・ 一日の生活と時刻を表す表現に慣れ親しませる。また、慣れ親しんだ表現が交流会で使えることに気付かせる。 ・ 尋ね方のモデルに続いて言わせ、慣れ親しませる。 ・ 使用する言語材料を限定して互いにインタビューし合う活動を行わせる。 ・ 「一番 なる人」を自由に決め、自分が本当に見付けたい人物を、インタビューして探す活動を行わせる。 ・ テレビ電話交流会での自分のグループの発表の仕方や内容について話し合わせ、計画を立てさせる。 ・ より伝わりやすい発表になるよう、グループで準備した方がよい絵や、加えた方がよいジェスチャー等を互いにアドバイスさせる。
四線や字体に気を付けて小文字の書き写しをさせる。	2	1日の生活を英語で言ってみよう。 ・ チャンツ ・ 震源地ゲーム 小文字の書き写し	
小文字を高さの違いに気付けながら、四線上に正しく書かせる。	3	1日の生活の英語に慣れ親しまよう。 ・ チャンツ ・ ハエたたきゲーム ・ 聞き取りゲーム（「Hi, friends! 2」pp.22-23） 小文字の書き取り	
ゲームを通して慣れ親しんだ文（I get up at 6:30. など）のなぞり書きと書き写しをさせる。	4	何時に何をするのか英語で尋ねたり答えたりしよう。 ・ チャンツ ・ ピッタリゲーム 文のなぞり書き、書き写し	
インタビューの活動を通して慣れ親しんだ文のなぞり書きと書き写しをさせる。（限られた文から選ぶ。）	5	何時に何をするのか英語で尋ねたり答えたりしよう。 ・ チャンツ ・ 「早起きさんを探せ！」ゲーム 文のなぞり書き、書き写し	
インタビューを通して慣れ親しんだ文のなぞり書きと書き写しをさせる。（前回よりも多くの文から選ぶ。）	6	何時に何をするのか自由に英語で尋ねたり答えたりしよう。 ・ チャンツ ・ 「一番 なる人」ゲーム ・ 交流会に向けた話し合い 文のなぞり書き、書き写し	
自分が選んで書いた絵や文字を見ながら発表する練習をさせる。	7	日本の生活を伝える準備をしよう。 ・ チャンツ ・ 日本の生活を伝える準備	
	8	日本の生活を伝える準備をしよう。 ・ チャンツ ・ 発表準備	
自分が選んで書いた絵や文字を相手に見せながら発表させる。	9	お互いの国の生活を伝え合おう。 ・ 発表練習（グループ） ・ テレビ電話交流会（互いの国の生活について伝え合ったり、質問し合ったりする。） ・ 感想を発表し合ったり、事後に感想文を交換したりする。	
	10		

上記の指導計画の左側は、文字指導に関する工夫を示している。既習事項が繰り返し扱われ、書く活動が単元を通して細かな段階に分けて設定されている。

また、右側は、主体的・対話的で深い学びの視点からの教師の働き掛けを示している。自分の考えや思いを伝え合う単元終末の活動を設定し、聞いたり話したりする活動を中心に行う点では、外国語活動と大きく変わるものではない。教科化により、教師には正確さや英

語を駆使する力、更なる深い教材研究が求められるが、初歩的な英語の知識が中心であり、基本的な指導の流れや指導法をはじめとして、これまでの指導経験を生かすことが可能であるので、自信をもって積極的に授業づくりに取り組んでいただきたい。

- 引用・参考文献 -
文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語編』平成29年7月
文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』平成29年7月

（教科教育研修課 別枝 昌仁）